

- 一
問一 1 提唱 2 簡潔 3 兆 4 潮流

問二 個人情報に対する意識が低い上に、前の所有者の痕跡が残るものを提供し誰かが使い続けることに今の私達は気味悪さを感じるから。(六〇字)

問三 所有者の痕跡やモノの価値が生きているものをごみとみなし、生活上、廃棄せざるを得ないやるせなさや苦しみを強調するため。(五八字)

問四 資源の循環だけでは、ごみの廃棄と同様だとみなされ、人々の生活からごみという概念は消えず、モノの価値や所有者の痕跡も浄化されないのでは、ごみはゼロにはならない。(七八字)

問五 以前はモノの価値や所有者の痕跡を浄化する仕組みがあったが、モノとごみが二極化した現在、価値や痕跡の残るものを適切な浄化の方法がないままに廃棄する苦しみを自覚し、現代社会に則した新たな浄化の仕組みを構築しつつ、ごみを生活文化として考える関係。(一二〇字)

問一 二 自分の力で見つけ出した物の見方ではなく誰かにしつらえられたものだから。(三五字)

問二 マスメディアが凡庸な情報を大量に流布させ既成の解釈を刷り込み、人間が世界と関わる過程を失わせる状況。(五〇字)

問三 教育は自由を制限し能力強化を行うが、教育と道徳的に等価である薬による能力強化は、選択の自由もあるため許されるという議論。(六〇字)

問四 結果だけで教育を評価し、既定の目標に子供が至る過程を合理化しようとする傾向。(二八字)

問五 教育で子供が得た結果だけを重視せず、自力で世界と対峙しながら人間が情報をまとめ上げる独自の物の見方を獲得していく紆余曲折の過程を評価し、人間形成に寄与するもの。(八〇字)

問一 ㊦

イ 森川許六の器量

ハ 師と仰ぐ森川許六の絵画

ホ 後鳥羽上皇のお言葉

問二 許六が絵画と俳諧の両方を学びつつ、目的とするところが同一なのは感心だということ。(四〇字)

問三 自分の俳諧は、実生活には無用のもので、多くの人の好みに反する何の役にも立たないものであるということ。(五〇字)

問四 書道も俳諧も、先人が残した表面上の形を模倣するのではなく、先人が求めた精神を追求すべきだということ。(五〇字)

問一 四

- a ごとし
- b かならずしも
- c つひに(にはかに)
- d もし
- e のみ

問二

なんぞふぐをもつてせざるや(と)

問三

人が死んだら礼法に従って埋葬するものだ。
死ぬ間際の錯乱した言いつけなど聞き入れてはならない。

問四

親の意志を生前と同様に尊重しようとするのは、孝行な息子の心情として理解できるので、古くからの礼だからといって、やみくもに従おうとするのは賛成できない。(七五字)